

コーパスを活用した類義語分析

—「連動的な変化の進展」を表す用法—

砂川有里子（筑波大学）

QWU00504@nifty.com

【要約】

砂川（2013）では、ニツレテとニシタガッテという複合辞を取り上げ、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）による用例検索と、直前の名詞の頻度調査に基づく量的・質的な考察を行い、両者の類似点と相違点を明らかにした。本稿では、ニオウジテを取り上げ、砂川（2013）によるニツレテとニシタガッテの分析結果と比較することにより、これらの複合辞に共通して見られる「連動的な変化の進展」を表す構文について考察し、これらの構文が類似の意味を表すのは、周辺的な用法においてであり、典型的な用法においては、ニツレテ構文・ニシタガッテ構文とニオウジテ構文との間に大きな隔たりがあることを示す。

1. はじめに

日本語教育でよく取り上げられる類義表現の1つに、2つの事態が連動して進展することを表すような表現がある。

- (1) メディアの発達につれてスポーツが普及していった。
- (2) 加齢に従って記憶は減退する。
- (3) 年金額は物価の上昇に応じて増加する。
- (4) 経済の成長に伴って所得格差が生じる。

これらは、「連れる」「従う」「応じる」「伴う」という動詞からできた複合辞で、連用形やテ形の形で用いられる。上記の用例はいずれも似たような意味を表しており、これらのうちどれを使っても問題なく正しい文ができる。

- (5) メディアの発達に {つれて／従って／応じて／伴って} スポーツが普及していった。

しかし、以下のように入れ替えることのできない用例もあり、日本語学習者たちを悩ませる結果となっている。

- (6) プロは、ホールの状況、風向きなどで、必要に {応じて／×伴って／×つれて／？従って} 弾道を打ち分けます。
- (7) すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に {応じて／×伴って／×つれて／従って}、ひとしく教育を受ける権利を有する。

砂川（2013）では、複合辞の「につれ・につれて」と「に従い・に従って」について、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（以下、略語のBCCWJを用いる）の調査を基に考察した。本稿では、複合辞の「に応じ・に応じて」を取り上げ、砂川（2013）の調査結果との比較を行うことにより、これらの類義表現を用いた構

文¹の意味相互の関わりについて考察する。

以下においては、上記の複合辞を、それぞれ「ニツレテ」「ニシタガッテ」「ニオウジテ」と示すことにする。これらは連用形（ニツレ、etc.）、テ形（ニツレテ、etc.）、丁寧形（ニツレマシテ、etc.）、ひらがな表記（につれて、etc.）、漢字表記（に連れて、etc.）といったバリエーションの代表形である。

2. 砂川（2013）の概要

本論に入る前に、まずは、砂川（2013）の概要として、複合辞と動詞との違いについて、および、複合辞を用いたニツレテ構文とニシタガッテ構文の意味・用法について述べることにする。

冒頭に挙げたニツレテ、ニシタガッテ、ニオウジテ、ニトモナッテという形式は、それぞれ「連れる」「従う」「応じる」「伴う」という動詞が他の語と複合して、1つの機能語としての役割を果たすようになった形式である。これらは動詞としての意味や機能を失い、否定、命令、受け身、使役、可能などの形を持たず、条件節・理由節などの従属節や主節の述部に用いることができなくなっている。例えば、「計画に従う」の場合の「従う」は動詞であるために、以下のようにさまざまな活用形で用いることができるし、従属節や主節の述部に用いることができる。

(8) 計画に従って行動した。計画に従わずに行動した。計画に従え。計画に従うな。計画に従えば失敗しない。

しかし、「加齢に従って記憶は減退する」という(2)の文の場合は、「加齢が進むのと連動して記憶が減退する」という意味を表しており、「計画に従う」の「従う」が持つ意志動詞としての意味を失っている。また次のような言い方は許されず、「に従い」「に従って」「に従いまして」という形式に限定してしか用いられない。

(9) ×加齢に従わずに記憶は減退する。×加齢に従え。×加齢に従うな。×加齢に従えば記憶は減退する。

このように(2)の「従う」は、動詞のもつ意味・機能の大半を失って、接続助詞に準じる機能を果たす複合辞と化し、限られた形式でのみ用いられ、時間軸に沿って生起する2つの変化の関係性を表す一語相当の単位となっている。

次に、ニツレテ構文とニシタガッテ構文の意味と用法に関して概要を述べる。

砂川（2013）では、BCCWJ Ver. 1.0.5の全サブカテゴリーを用いた用例検索を行い、直前に用いられた名詞や動詞の意味と頻度を基に、両形式の意味と用法を記述した。その要点は、以下の通りである。

1. これらの複合辞は、「XニツレテY」「XニシタガッテY」という構文により、「Xの事態と連動してYの事態が生起し、進展する」という意味を表す。
2. XとYの表す事態は時間軸に沿って進展する何らかの変化である。
3. これらの構文は、最も典型的には「一方向的に進展するXの事態と連動してYの事態が生起し、進展する」という意味を表す。調査で得られた用例はほとんどがこの意味を表していた。

(10) 時間がたつにつれ、これらの物質は有害なアンモニアなどの物質に変化する。(溝口満『骨の学校3』)

¹砂川（2013）では「構文」という用語を用いていないが、複合辞の表す意味と、複合辞を使った文の表す意味とを区別するために、本稿では複合辞を使った文のことを「構文」と呼ぶことにする。

(11) 両者の生産の拡大に従って労働者は増えた。(鎌田慧『日本列島を往く3』)

4. 上記の意味の他に、ごくまれに、複数の事態が繰り返し生起し続けることを表す場合がある。

(12) データベースの Oracle マスターなんて製品のバージョンアップにつれ出題範囲が増えていくので、早いほうがいいです。(Yahoo!知恵袋)

(13) とりわけ子どもの成長に従って、刻一刻更新するホームページがある。(加藤明弘・青田吉弘『一人ひとりからの情報化社会』)

(12)は製品のバージョンアップの繰り返し、(13)はホームページの更新の繰り返しが表されている。

(12)の X、(13)の Y で示された事態は1つないしは複数の主体による繰り返りで、それが継続的に進展することを表している。3で示した「一方向的な進展」を表す用例の頻度に比べると「繰り返しの継続」を表す用例の数は極めて限られており、典型から大きく外れた周辺的な意味であると言える²。

5. さらに、ごくまれに多方向的に進展する事態を表す用例がある。

(14) シーズーの動きにつれて、木綿のブラウスの胸が突き出たり引っ込んだりし、板にまたがっている腰や太腿あたりのジーンズがびんと張っていた。(ロバート・ジェームズ・ウォラー(著)/村松潔(訳)『スローワルツの川』)

(15) あるいは準備の増減にしたがって為替相場を上下させるようにすべきである。(スーザン・ストレンジ(著)/小林襄治(訳)『カジノ資本主義 国際金融恐慌の政治経済学』)

(14)のシーズーの上下の動きとそれと共に起こるブラウスの形状の変化は、物理的な変化であるが、どちらも多様な動きや多様な変化を表しており、多方向的に進展する変化であると言える。また、(15)は時間の経過に沿った増減という抽象的な変化を表しているが、増えたり減ったりという多様な変化と、それに伴う為替相場の上下という多様な変化が表されている。このように「多方向的な進展」を表すものも、「一方向的な進展」を表す用例の頻度に比べると、その数は極めて限られており、典型から大きく外れた周辺的な意味であると言える。

このように、ニツレテ構文もニシタガッテ構文も、典型的には「一方向的な進展」を表し、その周辺に、「繰り返しの継続」や「多方向的な進展」という非典型的な意味を表す用法がわずかに観察されることが明らかとなった。

以上のことから、ニツレテ構文とニシタガッテ構文は、「Xの事態と連動してYの事態が生起し、進展する」という意味、すなわち「何らかの変化を表す2つの事態の連動的な進展」を表していると言える。以下においてはこのような意味を総称して「連動的な変化の進展」と呼ぶことにする。以上をまとめると、ニツレテ構文とニシタガッテ構文の表す「連動的な変化の進展」という意味には、「一方向的な進展」という典型的な意味の周辺に「繰り返しの継続」や「多方向的な進展」という非典型的な意味が位置づけられていると考えられる。それを示したのが図1である。

²砂川(2013)では、「繰り返しの継続」を表す用法も繰り返される事態が一方向的に継続することを表すものであるため、「一方向的な進展」の一種と捉えたが、本稿では典型的な意味と周辺的な意味を分けて記述するため、別のグループに属するものと位置づけ直すことにする。



図1 ニツレテ構文とニシタガッテ構文の典型的・非典型的意味

3. ニオウジテの検索方法

この節では、本稿で考察の対象とするニオウジテについて述べる。用例の調査方法としては、ニツレテ、ニシタガッテと同様に、BCCWJ Ver. 1.0.5の全サブコーパスを対象に用例検索を行った。その際、砂川(2013)にならって、名詞は長単位、動詞は短単位での検索を行った。また、「応じる」の語彙素読みに「オウジル」と「オウズル」の2種があったため、どちらも検索し、その結果を合算した。検索によって得られた用例から、形態素解析によって生じた間違いを正したり、ゴミを除いたりして最終的な調査データを確定した。以上の検索方法の詳細については、砂川(2013)を参照されたい。

以下に、砂川(2013)で調査したニツレテとニシタガッテの検索結果と併せて、本稿で新たに加えたニオウジテの検索結果を表示する。

表1 検索結果とその後の処理

	①検索方法	②検索用例数	③他のリストへ移動	④他のリストから移動	⑤小計 (②-③+④)	⑥ゴミの数	⑦連用形・テ形・丁寧形以外の形	最終的な調査データの用例数 (⑤-⑥-⑦)	複合辞の数 (%)
名詞+ニツレテ	長単位	2,263	「動詞+ニツレテ」へ 20	「動詞+ニツレテ」から 2	2,245	24	257	1,964	240 (12%)
動詞+ニツレテ	短単位	2,335	「名詞+ニツレテ」へ 2	「名詞+ニツレテ」から 20	2,353	48	0	2,305	2,305 (100%)
名詞+ニシタガッテ	長単位	5,767	「動詞+ニシタガッテ」へ 0	「動詞+ニシタガッテ」から 17	5,784	14	2,053	3,717	70 (2%)
動詞+ニシタガッテ	短単位	634	「名詞+ニシタガッテ」へ 17	「名詞+ニシタガッテ」から 0	617	1	0	616	616 (100%)
名詞+ニオウジテ	長単位	7403	「動詞+ニオウジテ」へ 0	「動詞+ニオウジテ」から 39	7,442	14	2,798	4,630	4,021 (87%)
動詞+ニオウジテ	短単位	46	「名詞+ニオウジテ」へ 39	「名詞+ニオウジテ」から 0	7	1	0	6	6 (100%)

表1の右から2列目「最終的な調査データの用例数」というのは、それぞれの調査項目の連用形・テ形・丁寧形の用例数を合わせたもので、この中には複合辞だけでなく動詞として用いられた用例も含まれている。ここから手作業によって複合辞を抜き出した³。その数と比率は最も右の「複合辞の数」に示してある。

³動詞と複合辞の判別基準の一つとして、主文の述語に用いられるかどうかというテストを用いた。例えば、

「複合辞の数」を見ると、ニツレテとニシタガッテには、名詞接続と動詞接続のどちらもある程度の数が観察され、動詞接続は名詞接続の10倍近くの高頻度で用いられている。それに対して、ニオウジテでは、名詞接続の頻度が非常に高いのに対して動詞接続がわずか6例と極めて限られている⁴。ニオウジテに関して、伊丹(2006)は、「名詞のみ可能で、動詞は使えない(p.40)」と述べているが、この表からもその妥当性がほぼ認められる⁵。そこで、これ以下での本稿の考察は、名詞接続の場合に限って行うことにする。

表1の名詞接続における複合辞の比率を見てみると、ニツレテは12%、ニシタガッテは2%と非常に低いのに対して、ニオウジテは87%と極めて高い。このことから、ニオウジテは、「ご希望に応じます」「呼びかけに応じない」のような動詞の用例よりも、「目的に応じて使い分ける」「成長に応じて変化する」のような複合辞の用例の方がはるかに多いことが分かる。

以下においては、ニツレテ構文、ニシタガッテ構文と適宜比較しながら、ニオウジテ構文の意味と用法を記述し、ついで、これら3つの構文に共通して現れる「連動的な変化の進展」という意味について考察することにする。

4. 直前の名詞の頻度

まずは、ニオウジテの直前に来る名詞の上位20個までをニツレテとニシタガッテの結果と共に示す⁶。

表2 直前の名詞の頻度:ニオウジテ/ニツレテ/ニシタガッテ

名詞+ニオウジテ			名詞+ニツレテ			名詞+ニシタガッテ		
順位	名詞	頻度	順位	名詞	頻度	順位	名詞	頻度
1	必要	902	1	成長	20	1	成長	10
2	状況	211	2	動き	11	2	経過	6
3	区分	94	3	進展	10	3	動き	5
4	実情	77	3	変化	10	3	変化	5
5	程度	76	5	経過	9	5	拡大	3
6	目的	68	6	進行	8	5	形	3
7	所得	63	6	世	8	5	進展	3
7	能力	63	6	増加	8	5	推移	3
9	変化	54	6	発展	8	9	過程	2
9	特性	54	10	拡大	7	9	差	2
11	用途	43	10	高まり	7	9	上昇	2
12	種類	34	12	加齢	5	9	進歩	2
13	場合	33	12	歌	5	9	流れ	2
14	実態	31	12	発達	5	9	能力	2
15	ニーズ	30	15	音	4	9	年齢	2
16	年齢	26	15	進歩	4	15	花期	1
17	規模	25	17	上昇	3	15	角度	1
18	好み	23	17	成熟	3	15	加齢	1
18	時	23	17	普及	3	15	雁行型発展	1
20	声	21	17	勃興	3	15	建設	1

「この表の数値に応じて配分額を決定した」「この表の数値に従って配分額を決定した」という類似した意味を表す用例であっても、「配分額の決定はこの表の数値に応じた」と言いにくいのに対して、「配分額の決定はこの表の数値に従った」と言える。このことから、これらの用例の「に応じて」は複合辞、「に従って」は「格助詞+動詞[従う]のテ形」と判定した。「応じる」の動詞としての割合が少ない結果となったのは、「応じる」を主文の述語に使える用法が限られていることによるものである。

⁴動詞に直接接続する形の他に、動詞が「の」を介して接続する「動詞+の+に応じて」のような形もある。このようなタイプは、短単位検索の結果、12例見いだされた。表1にこの数は含まれていないが、この数を含めても動詞接続は非常に少ないと言える。

⁵動詞接続の用例は次のようなものである。「このように供給量は、その財やサービスの価格が高く(低く)なるに応じて増大(減少)する。(西部邁ほか『新しい公民教科書』)」「すなわち、産業資本段階の軽工業にかわって重工業が発展するに応じて、株式会社制度が広範に普及しはじめ、(高橋誠、柴田徳衛編『財政学』)」「それから円運動は、力学の不変法則に従いながら、塊が濃縮によって小さくなるに応じ速まる。(佃堅輔『スーチンの雉』)」

⁶表2のニシタガッテは紙幅の関係で最下位の項目全てを示せなかった。最下位の順位の内、表に示せなかったものは、15位の「集中管理・修行・増減・増大・強さ・時間経過・発育・発達・発展過程・変易・変動・膜厚増加」である。

表2に見られるように、ニツレテとニシタガッテの場合、直前に来る上位の名詞は、漢語の動名詞（「成長」「進展」など）と動詞の連用形（「動き」「高まり」など）が多い。中にはこれらに該当しない「加齢」「過程」「花期」などの名詞もあるが、それらも含めて、移動、時の推移、様態・質・量の変化など、時間軸に沿って起こる何らかの変化を表すものが大半を占める。それに対して、ニオウジテではこの種の名詞がほとんど見られず、「必要」「状況」「区分」「実情」など、変化とは関わりのない抽象物を表す名詞が大半を占める。ニオウジテでは、上位20位までの中で明示的に「変化」の意味を表すものは、9位の「変化」のみである⁷。

また、ニツレテとニシタガッテには表の網掛け部分にあるように、両者に共通した名詞が数多く認められるが、ニオウジテの場合、他の2つと共通して認められるのは、「変化」の一語のみ、ニシタガッテと共通して認められるのは「能力」と「年齢」の2語のみである⁸。

以上のことから、ニオウジテ構文は、「連動的な変化の進展」を表すことを主眼とするニツレテ構文やニシタガッテ構文とはかなり性格の違う表現であることが予想される。そこで、以下においては、検索された用例を基に、ニオウジテ構文の意味と用法を詳しく検討する。次いで、ニツレテ構文とニシタガッテ構文との比較を通じて、「連動的な変化の進展」という意味に関するこれらの構文の相互の関連について考察することにする。

5. ニオウジテ構文の意味と用法

前節で述べたように、ニオウジテに接続する名詞は、変化に関わらない抽象物を表すものが大半を占める。それらの例は次のようなものである。

(16) プロは、ホールの状況、風向きなどで、必要に応じて弾道を打ち分けます。(塩原義雄『週刊ボスト』)

(17) それぞれを、相手によって使い分けるのではなく、状況に応じてきちんと表現したい。(実著者)

⁷ニオウジテの場合、何らかの変化を表す名詞は、20位以下にもわずかに観察されたが、「進展(36位)」「変動(37位)」「動き(57位)」「成長(63位)」の順位に見られるように頻度が低い。

⁸ニシタガッテが「能力」と「年齢」を伴う全ての用例を以下に示す。

(a) スプリンターは求められる能力にしたがって筋骨隆々とした身体に、マラソンランナーは筋骨以外の余計な筋力をそぎ落とすためほっそりとした体型になるのです。(中康匡『本当にアテネるということ』)

(b) 幼児英語教育を取り扱う英語教育機関の多くでは、子供たちの能力に従って自由に昇給できるシステムを採用している。(今林浩一郎『日米大学比較不可知論』)

(c) 体は、年齢に従って変化し、発育のしかたには男女の違いがあり、思春期になると、体のはたらきが変化して、精通・初経などの現象が起こることが理解できる。(小原健治・松下健二『新しい教育課程の創造』)

(d) 実質賃金収入は概して、勤労期間中ある時期には上昇するものの、後には年齢に従って低下する。(デービッド・ワイズ・ロビン・ラムスデイン・野口悠紀雄『高齢化の日米比較』)

これらの用例は、いずれも「連動的な変化の進展」を表しており、ニオウジテに言い換えられる。しかし、ニツレテには言い換えにくいという特徴を持つ。ニシタガッテ構文とニツレテ構文は「連動的な変化の進展」を表すという共通した特徴を持つが、以下のような違いがある。

ニツレテは五感で感じられる「音」「声」「匂い」「風」などの名詞を伴ったり、「世」「歌」「日」といった特定の名詞を伴って慣用的な表現を作ったりするが、これらの場合以外では、「時間軸に沿った変化」という意味が比較的明確に表せる名詞でないと伴いにくい。それに対して、ニシタガッテは、「能力」「年齢」「程度」など、「時間軸に沿った変化」という意味を直接には表さない名詞を伴うことができる。「従う」という動詞には、例えば「きまりに従う」のように、「準拠する」という意味がある。上記の例は、このような意味から拡張した複合辞の用法だろうと思われる。このように、コーパスの中にはわずかではあるが、ニオウジテに言い換えられるがニツレテには言い換えられないニシタガッテの用例がある。

不明『ダメなママでもいいじゃない』)

- (18)かつては公的制度のすべてを租税で賄っていたが、今では、加入者の区分に応じて異なる定率患者負担が採り入れられている。(エリアス・モシアロスほか(編著)一圓光彌(監訳)『ヨーロッパの選択』)
- (19)また、「Mozilla」「Galeon」「Konqueror」などのフリーなウェブ・ブラウザが追加され、目的に応じて使い分けることができるようになりました。(一條博『Debian 3 兄弟でつくる超安価 LAN』)
- (20)自治事務については、「地方公共団体が地域の特性に応じて当該事務を処理することができるように特に配慮しなければならない」とされている。(大森彌『福祉政策』)
- (21)この二つの助動詞は、それぞれ承ける動詞の活用の種類に応じて使い分けられる。(大野晋『日本語以前』)
- (22)給水方式を選定するに際しては、建物の規模に応じ、これらの条件を踏まえ決定する。(東孝弘・落合昇『空気調和・衛生工学便覧』)

これらの文は、「X ニオウジテ Y」の形で、X には「必要」「状況」「区分」「目的」「種類」「規模」など、さまざまに異なる状況を想定しうる名詞が用いられ、Y にはその多様な状況のそれぞれに対応するための意志的な行為が表されている。この種の文が表す意味は、「多様な状況に適した対応として何らかの行為を行う」ということである。ここではこのような意味を、「多様な状況への対処」と呼ぶことにする。ニオウジテの用例の中で圧倒的に多いのがこの用法である。

一方、次の用例では、Y が非意志的な事態を表している。

- (23)すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。(古田足日『宿題ひきうけ株式会社』)
- (24)真実を語りなさい」という訓示は、彼の生涯の中で、時に応じて頭に浮かぶ言葉であったのだ。(中西道子『タウンゼンド・ハリス』)
- (25)血圧低下の程度に応じて、ふらつき、立ちくらみから失神まで種々の症状を伴うことがある。(分担不明『リハビリテーション医学 Q&A』)
- (26)1周 200mの流水プールのまわりに、水深 30cmの幼児用、50cmの子ども用と、年齢に応じて楽しめるプールがあるよ。(実著者不明『子どもとでかける栃木あそび場ガイド』)
- (27)保険料の額は、所得に応じて 5段階または6段階に分けられています。(朝日健二『図説・医療改革を見る 40 のポイント』)
- (28)均等割額は、市町村の規模に応じて税額が異なるが、(後略)。(岡崎昭・萱沼美香『ライフ・サイクルと社会保障・福祉』)

これらの場合も、X が表すのは、「能力」「時」「程度」「年齢」「所得」「規模」といった名詞で、「多様な状況への対処」を表す用法の X に見られたのと同様に、その程度や段階にさまざまに異なる状況を想定することが可能なものである。これらは、X が表すさまざまな状況に適した形で、Y の事態が生じたり Y の状態が存在したりすることを表す。このようなものを、ここでは「多様な状況に適した事態」を表す用法と呼ぶことにする。この種の用例は「多様な状況への対処」の用例に比べると、かなり少ないため、典型から外れた周辺的な意味であると言える。

以上に見た「多様な状況への対処」と「多様な状況に適した事態」を表す用法では、X に立つ名詞は「さまざまに異なる状況」を表しているが、その異なりは「時間軸に沿った変化」によって生じるものではない。

例えば、(24)に見られる「時に応じて頭に浮かぶ」の「時」は時間概念との関わりはあるが、そのつどそのつどの時を表すものであり、「時間軸に沿って進むプロセスとしての時」を表すものではない。一方、次の(29)に見られる「年齢に応じて変化する」のような用例では、Xに立つ「年齢」という名詞は、異なる多様な年齢を表すというより、「時間軸に沿って増えていく年齢」を指している。以下に示した用例は、Yに非意志的な事態が表されているという点では「多様な状況に適した事態」の用法と同様であるが、Yの部分もXの部分と同様に、何らかの変化を表し、これらの文全体で、「時間軸に沿って変化する多様な状況(X)」と連動して生じる「時間軸に沿って変化する何らかの事態(Y)」が表されているという点で異なっている。

(29) 入社して最初の数年間の給料はかなり低いが、社員は終身雇用で、しかも年齢に応じて給料が上がっていくことを知っているので不満は言わない。(エズラ・F・ヴォーゲル(著)多方向的な進展木本 彰子(訳)『ジャパニアズナンバーワン』)

(30) 血友病患者の症状と生活のコントロールの方法は、製剤の進歩とそれともなう治療法の変化に応じて大きく変わった。(栗岡幹英・田間泰子『社会的コントロールの現在』)

(31) さらに、使用済燃料等の核燃料物質等の輸送については、原子力発電の開発の進展に応じて、今後ともますます拡大することが予想される。(原子力白書)

(32) 一方、政府負担の研究費の対国民総生産比は、(中略)大きな変化はなく、概ね経済の成長に応じて研究投資を増加してきたとみることができる。(科学技術白書)

このような用例が、ニツレテ構文やニシタガッテ構文との関連で問題になる「連動的な変化の進展」に関わるものである。

一方、次の用例のXは「時間軸に沿った変化」を直接的には表していない。しかし、Yの部分時間が時間軸に沿った変化を表すことから、「連動的な変化の進展」の意味が感じられる。

(33) 組織成員の専門性、自律性、動機づけの内発性の程度に応じて、組織と組織成員の関係は変化する。(田中丈夫『ホワイトカラーと経営革新』)

(34) 配偶者の所得に応じて控除額が増減する方式になっており、(後略)。(杉本貴代栄『女性化する福祉社会』)

(33)や(34)が表しているのは、「動機づけの内発性の多様な程度」や「配偶者の所得の多様な金額」といったXの表す多様な状況に連動してYの変化が生起し、進展することである。このようなものも含めて、(29)～(34)が表す「連動的な変化の進展」を、「多様な状況に連動する変化」と呼ぶことにする⁹。

さて、ニオウジテ構文に見られる「多様な状況に連動する変化」を表す用法では、Xに「変化」「進展」「成長」のように何らかの変化を表す名詞や、「年齢」「程度」「所得」のように何らかの度合いの違いを含意する名詞が用いられる。しかし、Xに変化や度合いの違いを表す名詞が立ったからといって、必ずしも「多様な状況に連動する変化」の意味が表されるわけではないことには注意する必要がある。例えば、Xに明示的な変化を表す名詞である「変化」という語が用いられた場合でさえも、全てが「多様な状況に連動する変化」を表すわけではない。以下の用例は、Xに「変化」という語が用いられているが、Yが意志的な行為を表しているため、「多様な状況に連動する変化」ではなく、「多様な状況への対処」の意味を表している。

⁹(29)～(32)のニオウジテは、ニツレテやニシタガッテに言い換えることができる。一方、(33)と(34)のニオウジテは、ニシタガッテには言い換えられるが、ニツレテには言い換えにくい。ニシタガッテとニツレテの違いが生じる要因については注8を参照されたい。

(35) 2001年に「長期基本計画」を策定した際、総合実施計画も作ったが、情勢の変化に応じて新たな実施計画を立てることにした。(読売新聞)

表2に示したように、Xに「変化」という名詞が使われている用例は54例認められるが、そのうち「多様な状況に連動する変化」を表すのは9例に過ぎず、残りの45例中、43例が「多様な状況への対処」、2例が「多様な状況に適した事態」の用例である。ましてや、Xに「変化」以外の名詞が用いられた場合、「多様な状況に連動する変化」を表す頻度は極めて少なくなる。このことから、「多様な状況に連動する変化」という意味は、「多様な状況に適した事態」と同様に、ニオウジテ構文の周縁的・非典型的な意味であると言える。

以下にXに「変化」が用いられた用例を示しておく。(36)と(37)が「多様な状況に連動する変化」、(38)と(39)が「多様な状況に適した事態」、(40)～(42)が「多様な状況への対処」の用例である。

(36) 社会状況の移り変わりと共に伴う人々の言語意識の変化に応じて、言葉も変化するなど、時代の変遷とともに国語は変化するが、国語施策もこれに適切に対応していかなければならない。(白書『我が国の文教施策』)

(37) 一方の変化に応じてもう一方も変化するを示す。(T・D・ミントン(著)/水嶋いづみ(訳)『ここがおかしい日本人の英文法』)

(38) 日常社会では、次々に生じるいろいろな変化に応じて、新しい局面が展開し、予期しない事柄が起きたりする。(酒井洋『鬼谷子の人間学』)

(39) そして、世の中の動き、客観情勢の変化に応じてそのおのおのの努力が才能が報いられていく。(Yahoo!ブログ)

(40) 時局の変化に応じて、彼は、計画の大筋を立て、洗い直し、補正する。(エミール・ルートヴィヒ(著)多方向的な進展北澤 真木(訳)『ナポレオン』)

(41) 身体の重さの変化に応じて姿勢を制御する力などは、すべての動きの基本となるものである。(大宮とも子『コミュニケーション的關係がひらく障害児教育』)

(42) 状況や情勢の変化に応じて適切な処置を執ること。(紀司勲『市民がつくる暮らし・自治・未来』)

以上、ニオウジテ構文の意味と用法について考察し、「多様な状況への対処」という典型的な意味の周辺に、「多様な状況に適した事態」と「多様な状況に連動する変化」という非典型的な意味があることを述べた。これを表したのが図2である。



図2 ニオウジテ構文の典型的・非典型的な意味

ニオウジテ構文は、「多様な状態 (X) に見合う事態 (Y) の生起」という共通した意味を表しており、X には「多様な状況」を表す名詞が用いられる。そして、Y に意志的な事態が表されたとき「多様な状況への対処」、非意志的で時間軸に沿った変化に関わらない事態が表されたとき「多様な状況に適した事態」、非意志的で時間軸に沿った変化に関わる事態が表されたとき「多様な状況に連動する変化」の意味となる。また、「多様な状況に連動する変化」を表す場合、X のほうも時間軸に沿った変化を表す名詞か、何らかの度合いの違いを意味する名詞が用いられる必要がある。ニツレテ構文やニシタガッテ構文に共通する「連動的な変化の進展」を表すのは、この「多様な状況に連動する変化」を表す用法である。

6. ニオウジテ構文とニツレテ構文・ニシタガッテ構文との関わり

最後に、ニオウジテ構文が「連動的な変化の進展」（すなわち「多様な状況に連動する変化」）を表している用例をさらに検討し、ニツレテ構文とニシタガッテ構文が表す「連動的な変化の進展」（すなわち「一方向的な進展」「繰り返しの継続」「多方向的な進展」）との関連について考える。

表 2 に示したように、ニオウジテ、ニツレテ、ニシタガッテの直前に用いられた上位 20 個までの名詞で、これら 3 つの複合辞に共通していたのは、すでに述べたように、「変化」という名詞だけであった。そこで、この節でも「変化」という語が用いられている用例を観察することにする。

前節で述べたように、「変化」を用いたニオウジテ構文の 54 例中に「多様な状況に連動する変化」の意味が認められたのは 9 例だけである。これら 9 例の中で、「一方向的な進展」に通じる意味を表すものは (30) (36) (37) に示した 3 例で、その他は以下に示すように、「繰り返しの継続」と「多方向的な進展」とが渾然一体となった意味を表している。

- (43) 以上のように、地震時の出火は、生活様式の変化に応じ、また、対策の裏をかくように発生してきており、(略) (実著者不明『建物の地震火災危険度に関する研究』)
- (44) 海岸線の位置は短期間にはほとんど変化しないが、砂(礫)浜海岸では、潮位や波浪条件の変化に応じて、絶えずその位置を変えている。(小池一之・市川清士『沿岸域環境事典』)
- (45) 公害防止投資も設備投資の一種であり、相当の費用を投ずる必要があるものである以上、景気動向を始めとする経済環境の変化に応じて公害防止投資額が左右されるのは事実である。(環境白書)
- (46) その後のニーズの変化に応じてハイビジョン対応などの要素を追加しながら拡張が続いている規格でもある。(松本俊哉『ネットワークマガジン』)
- (47) また環境の空間記憶の検索が学習時の身体方位に特異的な形で行われ、環境に対する身体方位の変化に応じて検索に要する処理時間や正確さが変化するならば、(朝倉暢彦・近江政雄『イメージと認知』)
- (48) 年齢別にみた世帯の消費内容は、所得の上昇と世帯属性の変化に応じて変わるが、(略) (労働白書)

上記の用例は、X で表されたさまざまな状況に連動する形で、地震時の出火の発生、海岸の位置の変化、公害防止投資額の増減、要素を追加しながらの拡張が繰り返されたり、処理時間や正確さ、年齢別世帯の消費内容がさまざまに変化したりすることを表している。ニオウジテ構文の表す「多様な状況に連動する変化」の意味は、そもそもニオウジテ構文の表す意味としては周地的・非典型的な意味である。このような非典型的な意味が、ニツレテ構文やニシタガッテ構文の表す「連動的な変化の進展」の周地的・非典型的な意味で

ある「繰り返しの継続」や「多方向的な進展」と重なりあったところに、ニオウジテ構文がニツレテ構文やニシタガッテ構文と類似した意味を表す局面が存在するのである。ニオウジテ構文の「多様な状況に連動する変化」の用例には、ニツレテ構文やニシタガッテ構文の典型的な意味である「一方向的な進展」に通じる用例がわずかに認められるが、これらは、「繰り返しの継続」と「多方向的な進展」が渾然一体となった(43)～(48)のような用法を介して広がったものと思われる。

以上の関係を図3に示しておく。

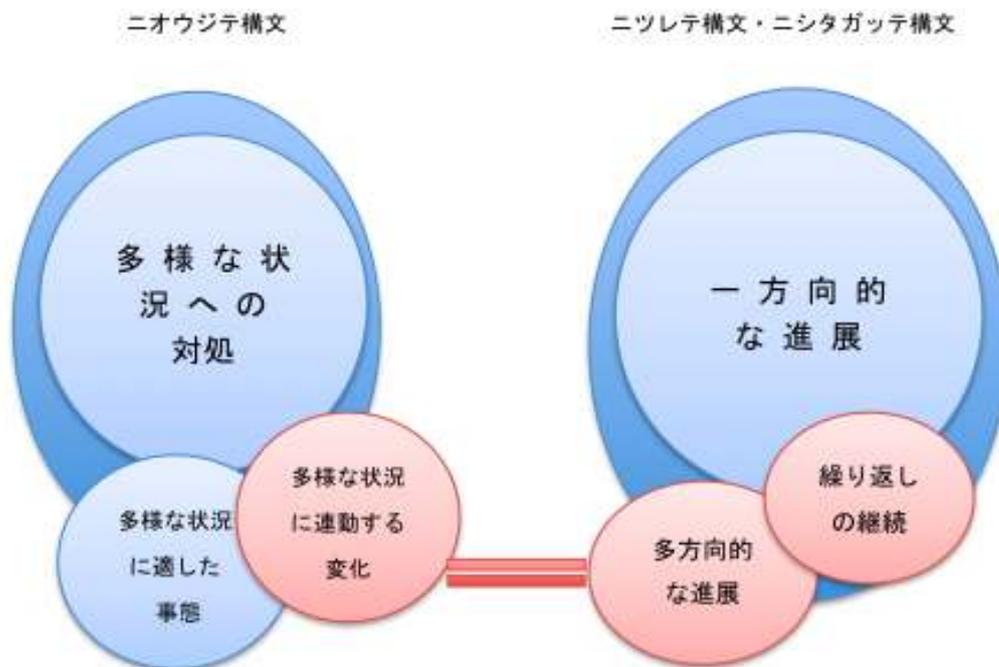


図3 「連動的な変化の進展」：ニオウジテ構文とニツレテ構文・ニシタガッテ構文の関連性

7. まとめ

「連れる」という動詞は、「主人が家来を連れて歩く」に見られるように、「人が同伴者を伴う」という意味を表している。一方、「従う」という動詞は、同じような状況を同伴者の視点から言い換えたもので、「家来が主人に従って歩く」のような言い方をする。「従う」はまた、「命令に従う」「規則に従う」のように「その通りにする」「それに準拠する」という意味や、「時の流れに従う」のように「それに逆らわずに身をまかせる」という意味も持つ。この点で「従う」は「連れる」よりも多義で豊富な意味を有する動詞であるが、先に述べた「主人が家来を連れて歩く」と「家来が主人に従って歩く」のように、異なる視点から述べた主従関係を表すという意味では、両者ともかなり類似した側面を持っている。

それに対して、「応じる（応ずる）」という動詞は、「要求に応じる」「問いかけに応じる」のように「何らかの働きかけに対応して行動する」という意味を表すが、この意味は「連れる」や「従う」には認められない意味である。さらに、「応じる（応ずる）」は、「連れる」や「従う」の持つ主従関係という意味を持たないという点でも、「連れる」や「従う」とは異なっている。

このようにもともとはかなり意味の異なる「応じる（応ずる）」と「連れる・従う」という動詞が、複合辞と化したときに「連動的な変化の進展」という類似した意味を表す構文を持つようになるのはなぜなのか。

この問に対する答えは、それぞれの構文が持つ典型的な意味と、その周辺に位置づけられる非典型的な意味の存在を考えることによって与えられる。すなわち、これらの構文が持つ典型的な意味は、ニオウジテ構文が「多様な状況への対処」、ニツレテ構文とニシタガッテ構文が「一方向的な進展」というように、全く異なっている。しかし、ニオウジテ構文の周邊的な用法においては、ニツレテ構文とニシタガッテ構文が持つ「繰り返しの継続」や「多方向的な進展」という意味が渾然一体となった「多様な状況に連動する変化」という意味を表すことがあり、この周邊的・非典型的な意味が、ニツレテ構文やニシタガッテ構文の周邊的・非典型的な意味と重なり合って、相互に極めて類似した「連動的な変化の進展」という意味を共有するようになったものと考えられるのである。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 伊丹千恵（2006）「「に」に応じて」の意味・用法」東京外国語大学『留学生日本語教育センター論集』32号, 33-46.
- 大阪YWCA専門学校・岡本牧子・氏原庸子（2008）『くらべてわかる日本語表現文型辞典』Jリサーチ出版
- グループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版
- 国立国語研究所 [山崎誠・藤田保幸]（2001）『現代語複合辞用例集』国立国語研究所
- 砂川有里子（2013）「コーパスを活用した類語分析—複合辞「ニツレテ」と「ニシタガッテ」—」藤田保幸編『形式語研究論集』和泉書院, 35-60.